（様式⑦－1　小学校・中学校）

確かな学びと豊かな心･健やかな体をはぐくむ　学校力向上プラン【学校評価計画書】

堺市立浜寺小学校
校長　濵本　教行

中学校区におけるめざす子ども像

いきいきと学ぶ子の育成のため、学力調査等の詳細な分析を行い、学習指導における課題を小中学校で共有することで、「確かな学び」を推進していく。また、それぞれの学年の子どもの発達段階に応じた理解度や学習能力の育成に向けた取り組みの充実に努めていく。そして、基礎基本的な学習内容 の定着を確かなものとしていく。自ら学ぶ子どもの育成を小中の連携を深めながらより推進していく。

令和６年度　重点目標

〇「いきいきとしている学校『子どもも教職員も』」の具現化に向け、子ども一人ひとりはもとより教職員も含めて「居場所と出番」が確保できるように努める。
〇知（基礎学力を土台とした学力向上）・徳（学びを支える心）・体（健康維持のため体を動かす喜びの体感）がバランスよく成長できるような取組について，教員の指導力向上を絡めて推進する。
〇地域をキャンパスとしたり、地域人材を活用したりして、地域共育学校の取り組みを推進し、「地域に生き、やがては地域に貢献できる人」の素地をつくる。

「確かな学び」の現状

●令和５年度の全国学力テストでは、算数の平均正答率が大阪府と同等で国語・理科・わくわくは下回っている。
●どの教科も標準偏差が大きくなり，学力の二極化が見られる。特に中上位層が少ないことが課題である。
●学校に行くのは楽しいと思っている児童は多いが自尊感情が高まっている児童とそうでない児童との二極化が見られる。

「豊かな心・健やかな体」の現状

●ニュースポーツの導入や体育委員会の取り組みなど，始めたばかりで，どう活用・発展させていくかが課題である。
●校舎改修工事の為，環境が整っていない中での体育指導の充実が難しく，運動好きな児童と苦手な児童の二極化が課題。
●長時間のスマートフォンやゲームの使用等により，睡眠時間が短くなったり運動不足になったりする児童が見られる。

	中項目	具体目標	具体的な取組 （●重点とする取組、★中学校区での取組）	判断基準 （評価のものさし）	評価方法	評価時期	進捗確認 （７月）		達成状況（年度末） 自己評価２月		学校関係者評価３月	
確かな学び	学力向上・授業改善	基礎基本の習得に向け赤ペン先生等の人材も活用し、学びの土台づくりを行う。「いきいきと学ぶ子」の育成のため、子どもたちが「知りたい! 伝え合いたい!」と意識が高まるよう授業改善を行う。	●★子ども自身が具体的なことから問題意識を持ち「知りたい!　伝え合いたい!」につながるような課題設定について研究を深める。	・具体的な課題設定の内容とそれに対する子どもの取組の様子やノート、成果物 ・研究授業時における協議内容	子どもの様子やノート、成果物 本プラン状況確認時	適宜 ９・１月	A	子どもを本気になって取り組ませるためには，意外性やズレのある課題設定が必要。	A	子どもたちが主体となって考える課題設定により自分の考えを伝えようとする子どもの姿が見られた。	A	学校や地域などの身近なテーマで児童の主体性や学習意欲、伝え合うことにつながると思われた。研究授業の成果が通常授業に活かされる事は重要である。
			〇問題解決の際に、子ども自身が見通しや計画を持たせるための工夫を研究し、考え合う授業につながる実践を行う。	・子どもに見通しを持たせるための工夫の方法とその回数 ・１日１回以上は、考え合う授業につながる授業を実施する	子どもの様子やノート、成果物 本プラン状況確認時	適宜 ９・１月	B	どの教室でも一日一回は質の高い話し合いができていることをめざしたい。	B	教師主導ではなく考えあう授業は設定しているが，それが深い学びにつなげるまでには至っていない。思考する場の有り方について研究が必要である。	B	児童が考えあう機会が増え、結果を発表することに慣れてきたようだが、その内容が重要。赤ペンをより細やかで効果的な指導にするには、メンバーが授業を聞く時間を短縮し児童に関わる時間を極力増やし、資料の当日配布は避け、赤ペンABを明確に使い分けた方が良いと思われる。
			〇各教員が指導力を高めることが、子どもの学力向上に寄与するという考え方から、得意分野を各教員がさらに伸ばすとともに、お互いが聞き合い，困り感を伝え合えるような補完関係を構築する。	・各教員による得意分野の研究実績 ・月１回以上は他教員からの刺激で改善しようする	改善した授業の回数 子どもの様子 本プラン状況確認時	適宜 ９・１月	B	公開授業計画を掲示したことで見に行きやすくなったが，まだまだ活発とは言えない。	B	公開の取組は素晴らしいが見に行く時間の確保が課題である。身近な学年や近い教室どうしから始めてみてはどうか。	B	先生方のスキルアップとチームワークが感じられる。さらなる授業力のアップに公開授業は有意義と思われるので、より効果が出るよう工夫して進められたい。
		学習習慣を定着させる一方策として、家庭での習慣をづくりを行い、自ら学ぶ子の育成をめざす。	〇毎日の宿題はもとより、読書を含めた家庭学習の定着を確かなものとするため、自主学習ノートの活用について研究を深める。 〇自主学習の必要性について自主学習コンテスト等による子どもと保護者の意識を高める。	・自主学習について、自らが計画を立て、学習していけるような子どもの育成をめざす ・学校，学年，クラスでの自主学習が高まるような取組を推進する	自主学習ノートの内容 本プラン状況確認時	適宜 ９・１月	A	子ども自らが計画を立て学習していけるような子どもの育成のために，学校として系統立てた指導が必要なのではないか。	A	子どもたちや保護者の関心の高まりが見える。引き続き自主学コンテストや廊下掲示を続け，子ども一人ひとりが興味関心を持つことについて自主学習の取組がきっかけとなり高まっていくようにしたい。	A	自主学習コンテストなどの取り組みは、独自の興味関心の気づきや追及から「出番」に繋がる一方で、その流れに乗れない児童との格差が見える。加えて言語力の原点である読書推進の取り組みが弱いのは残念であり、教育におけるその必要性と位置づけを確認されたい。
豊かな心	人権教育・生徒指	いじめのない「笑顔あふれる学校」をめざし、他者理解を進めながら自尊感情を高める取組を行うことで、お互いに認め合える人間関係作りを構築する。 そのために、道徳も含めて、障害者理解教育等を中心とした人権教育を推進するとともに、子ども自らが考え実現する取り組みを効果的に行う。	●特別活動はもとより授業の場で、「居場所と出番」を確保する。 〇他者理解を進めながら自尊感情を高める取組を推進し、居心地のよい集団作りを進め、いじめの早期発見と解決に向けて、全職員で組織的に取り組む。	・授業を含めての「居場所と出番」の確保 ・いじめを含めた問題行動の未然防止の取組の推進 ・発覚した場合、早期発見に向けた対策会議の設置と解消に向けての取組	各クラス等の取組 児童理解シート 職員会議 本プラン状況確認時	適宜 毎月 ９・１月	A	子どもの出番がある授業のあり方を考え実践していく。「今日は〇〇さんの課題についてみんなで考えよう」など。	A	授業と生徒指導は両輪との考え方に基づき授業で子どもを育てる（生徒指導も含めて）意識を持つ先生が増えた。いじめや問題行動では学年で共有➡早い段階で管理職に相談し未然防止に繋がった。	A	いじめ事案でマニュアルに基づく対応はできているようだが、潜在している事案もあるように感じる。学校として臨機応変に対応できるコミュニケーション力を備えておくことが、重大事案に至らずに済むリスクマネジメントとであると考える。
			〇浜寺っ子の決まり等を作るための子ども自らが参画した仕組み作り 〇挨拶のあり方や学校への持ち物について、みんなが楽しく過ごせるルールなどについて子ども自らが参画し、その意味を理解するとともに、ルールを守ろうとする規範意識を醸成させる。	・児童会や学年、学級の中で、ルール作りに関する話し合いを行い、実践した回数及びその効果	本プラン状況確認時 実施後の子どもの実態観察	９・１月 適宜	B	ルールメイキングクラブができたが，挨拶や廊下歩行について規範意識が低い。一方で子どもたちが学校をよくしようと活発に活動している姿もある。	B	ルールメイキングクラブは初年度であり，進め方については模索しながらであったが，理念は素敵なので少しずつ時間をかけた積み重ねが大切である。	B	児童の自主性による校則の見直しで、ルールメイキングクラブを発案して結果を出したことは、「出番」「考え合う」という点でも有意義だった。一方で廊下歩行や挨拶などは「はまでらっこのきまり」として課題が残る。加えて先生方の指導に差が出ないよう注意されたい、

	導		○お互いを認め合える集団づくり 特別活動や生活科・総合的な学習の時間等活動や 道徳をとおしてより良い集団づくりを行う。 （具体的な取り組み） ・はまでらっ子グループ ・異学年交流 ・障害者理解教育 ・道徳　等	・子どもが企画したはまでらっ子グループの実施回数やその内容 ・各学年における異学年交流の計画的な実施 ・障害者理解教育の推進 ・考え学び議論する道徳教育の推進	本プラン状況確認時 実施後の子どもの実態観察 児童理解シート	９・１月 適宜	B	支援学級の子どもたちへの理解がまだ低いと感じる。優しく接している子とそうでない子がいる。他者の悪い面を見るばかりでなく，良い場面や素敵な場面を知るための取組が必要。	B	浜Ｇはリーダーを数多く育成していく観点から，４・５年生に次のリーダーとして早めのバトンタッチすることも考えられる。 支援担当や聴覚支援の先生のお話で，子どもたちの関りがとてもよくなった。障害者理解教育として子どもも大人も学べた。	B	浜Ｇは縦割り活動として６年生では出番、他の児童には居場所となっていて、みんな楽しそうでよい表情をしていた。日頃とは異なる集団との交流の機会なので重要である。支援学級では通級学級との連携により今年も充実した学習生活を過ごしていた。

健やかな体	健康な身体づくり	自己の健康に関心をもち運動に親しむ子どもを育成する。	●運動に親しむために授業において個に応じた場の設定を工夫し、体力づくりを推進する。	・各クラスや学年での授業実践を保体給委員会で持ち寄り広める。	本プラン進捗状況時	９・１月	B	今後体育委員会で持ち寄らないと広められない。浜リンピックの取組がよかった。	B	「個に応じた場の設定」は良いが共有しきれてないので広める場が必要。今の環境下でクラス体育をどう向上させるのかが大切である。	B	校舎建替え工事中の劣悪な環境下で、僅かな校地スペースや体育館、第２グラウンドを最大限活用し体力づくりを工夫されていた。工事が原因で学校が解決できない課題は必ずあるので、事前に教育委員会と学校で分析し対策を検討されたい。
			○ニュースポーツなどの取組について外部人材等を活用した取組を推進する。	・地域人材を活用した内容とその実践回数。	子どもの振り返り等 本プラン進捗状況時	適宜 ９・１月	B	進んでいるが，教員の指導性との折り合いを再確認する必要があるのではないか。また総合の出前授業では地域コーディネーターと連携し計画を立てている。赤ペン先生では赤ペンＢの充実に向け地域コーディネーターと連絡を取り合い模索している。クラブ活動でも多くの地域ボランティアの方が来てくださっており，指導を仰いでいる。	B	昨年度より多く来ていただき，水泳やえがお体育，連運練習など連携を図ることができた。学校が立てた計画に則って地域の方の支援をもらっているので無理なく進められている。	A	地域人材の協力で水泳やニュースポーツの充実を図った。水泳は学年単位の２時間連続で大変充実し、個々の能力別指導が比較的行き届いていた。初めて取り組んだ支援学級のえがお体育では１学期の地域人材による指導を元に２学期には先生方自身が活動を企画実施し、児童の楽しそうな様子が窺えた。
			○体育委員会などの場において、年間を通じて子ども自ら体力向上に向けた取組を考え、体力づくりの大切さを意識できるようにする。	・体育委員会や各クラス等で実施した子どもが自ら考えた取組の実施回数	本プラン進捗状況時	９・１月	B	浜リンピックなど新たな取組はいいし，いい取組は継続してほしい。・１年生に委員会の児童が伝えていたのが良かった。・浜リンピックで表彰状をもらった子がとても喜んでいた。	B	体育参観において，子どもが考えたリレー・堺っ子体操教え合い・実行委員が司会・子どもが考えたダンス・低学年全体ダンスなど子ども主体にできた。 様々な体育委員会の取組は創造的でよかった。	A	まともな運動場がない環境で、体育委員会を中心に子どもたちが主体的に体づくりを考え、体育参観に取り組んだことは良かった。ゴールテープは達成感に繋がるので会った方が良い。浜リンピック＝スポーツテスト週間は大いに評価できる.
			○本校における保健課題に応じた保健指導を計画的に行う。	検診時の保健指導・保健委員による啓発	本プラン進捗状況時	９・１月	B	保健委員会による啓発が少ないように感じる。（複数）・委員会の活動は二学期以降か。・各担任による保健指導も大切ではないか。本校は睡眠時間が短い児童，生活リズムが悪い児童が多いように思うので，家での生活リズムについても指導してもらえたらありがたい。	A	保健だよりなどの内容についてお便りによる啓発にとどまらず，教室での啓発と合わせて行っていけたら良いのではないか。各担任による保健授業の充実が大切である。	A	個々の児童の健康衛生への関心や理解度は未知数だが、保健指導や保健委員会による清潔・身だしなみ・ハンカチのチェックなどの主体的な取り組みは良かった。感染症が社会問題になっており、今後の現実的な取り組みに期待したい。

校長より（年度末）

各教員は，それぞれの個性を生かしながら子どもたちにわかりやすい授業をめざしてきた。その成果として学校として一定の落ち着きがみられる。しかし，学力面からみると教員の努力が報われているとは言い難い状況である。子どもたちに生き抜く力を身につけるためには，学校としての取組をさらに焦点化して効率化することが必要と考える。

子どもの計画・運営する取組が増え，子どもの出番が見える場が多くなった。出番に関しては，授業の中でも出番をより意識した授業を創造することにより，主体的に時を過ごそう・生きていこうとする子どもが増えていくと思われる。この分野についての更なる充実が必要と考えられる。

本校の特徴として，「地域共育学校」の考え方がある。この理念に基づき今年度も赤ペン先生，水泳など体育授業，生活・総合など様々な分野で多くの地域人材の方が教育活動に携わっていただいた。また，保護者も図書ボランティアや登校時の安全対策に関わるなど「学校・家庭・地域が一体となった」取組を行ってきた。このような取組は，できる人材ができることを行うという考え方で，子どもの育成に携わっていただくことが大切と考えている。このことが，地域と共に生きる学校となり，そのような学校で学んだ子どもたちが，将来地域を支える人材となるような仕組みとして確立させたいと考える。

学校関係者評価者から（年度末）

一年を通して，随所で児童の居場所と出番を意識しながら、主体性と考え合う活動を重視する取り組みが見られ児童のいきいきとした様子が見られた。一方で教科学力に限らず、考える力や理解力などでも格差が見られ、基礎学力のための反復の機会の確保が課題で解決の糸口が見いだせない。

校則の見直しにおいて児童の主体的な取り組みに着目し、クラブ活動を活用し、結果的に児童の出番に繋がるなど他に類を見ない取り組みがあった。

最近では地域による学習サポートに対する若い先生方の要望が多く、時代の流れを感じる。校外学習での見守り、赤ペンの積極的な活用、防災、キャリア、障がい者教育などで、年度始めから地域に対する依頼があった。コロナ禍で中断した１年生の昔遊びへの老人会の協力を復活させるなど、地域側も可能な限り対応した。

昨年度以上に校長先生のリーダーシップの下、先生方のチームワークが感じられ、地域の児童が安心して学校生活を送っている様子が窺えた。